

令和7年度（2025年度）第1回千葉県体育学会大会 抄録

<一般研究>

Baseball5 の競技的構造および技術的特質に関する一考察 ～従来のベースボール型球技との比較を通じて～

○加藤敦也（千葉大学大学院）、Wannee Jermsuravong（タイ・Silpakorn 大学）
西野明（千葉大学）

本研究は、近年ベースボール型教材としても活用がみられる「Baseball5」に着目し、競技的・技術的特徴を提起することを目的とした。それらの特徴を明らかにするため、近藤ら(2021,2022)が提起したソフトボール及びティボールの競技構造や技術的特質との比較を行った。その結果、Baseball5 は使用する用具が少なく、素手でボールを扱うことなどの特徴を踏まえ、競技目的を「ボールを手のひらか拳で打撃することによって生じる時系列的競争の勝敗を、身体およびボールの移動で競う」とし、競技構造を提起した。次に、打者・打球に関わる規則や試合展開の早さなどから、技術的特質を「一度きりの試行でルール及び守備者によって規定されたフェアゾーン及び空間を奪取するための打者の手のひらか拳による打撃から始まる塁間の移動をボールの捕球・送球によって阻止するスピーディーでダイナミックな攻防を展開し、規定回数内の得点を競うこと」と提起した。

<実践研究>

ラグビーの防御戦術に関する有効性の実践的検証

○廣瀬恒平（尚美学園大学）、千葉剛（防衛大学校）、澤田大地（千葉経済大学附属高等学校）、高橋仁大（鹿屋体育大学）

これまでラグビーにおいて戦術研究が活発に行われてきたとは言い難く、その要因として戦術を実証的に研究する方法論が未発達であることが指摘されている。本研究では、先行研究を基に非トップレベルに適すると仮定される防御戦術を立案して、対象チームに導入し、導入前後のゲームパフォーマンスの比較から、戦術の有効性を検証することを目的とした。分析の結果から、戦術導入前と比較して導入後の下体へのタックル比率の増加、相手に押し込ませずに倒した比率の増加、ゾーンが前進してプレーが終了した比率の増加が認められた。このことから、概ね導入した戦術の遂行が認められ、これによりプレー成功率が向上し、ゲームへのアクティブな影響が得られたものと推察された。今後の課題として、実践的に戦術を研究する方法上の問題を解決するため、選手の体力要素の検討、またチーム全体から選手個人に焦点を当てたゲームパフォーマンスの分析などが挙げられた。

部活動の地域移行に関する実践報告 ～市原市の取り組み～

○馬場宏輝（帝京平成大学）

本研究発表は筆者の社会実験的な取り組みの紹介である。内容は「運動部活動地域移行の背景、運動部活動改革の経緯・取り組み、運動部活動地域移行の課題、運動部活動地域移行に関する馬場の見解（市原モデル）、市原市の取り組みと今後」である。運動部活動地域移行の課題は「中学生年代に限らず、これからの日本のスポーツはどうあるべきかという問題。

勝ち上がることを前提とした閉鎖的なスポーツシステムとの区別。未就学児、児童・生徒の生活スポーツのシームレス化。先生の善意だけに頼らない地域スポーツシステムの再構築。」であるといえる。現在、市原市で取組んでいる市原市モデルでは「運動部活動を地域に移行するという発想ではなく、地域に中学生年代のスポーツ環境を整える（将来的に多世代に広げる）。今まで、手軽に気軽にスポーツを楽しみたかった中学生がスポーツをする機会になる。競技志向と楽しみ志向を分ける。最終的にはお金をかけず手軽にスポーツが出来る環境も担保する。」を目指している。

千葉県におけるピックルボールの普及状況と今後の課題

○高橋史匡（千葉県ピックルボール協会）、吉原哲平（千葉県ピックルボール協会）、 金田晃一（千葉工業大学）

ピックルボールは簡単で小学生から高齢者まで多様な年代が楽しめるラケット競技として世界的に急成長しており、特に米国では競技人口の増加により4年連続で「最も成長しているスポーツ」として注目されている。日本の競技人口は約1万人とされる中、千葉県はクラブ数15、競技人口約640人と比較的普及が進んでいる。しかし、参加者は中年層が中心で若年層や高齢者は少ない。千葉県における普及の課題は、競技人口の少なさによる「人口規模」と、コート、大会、指導者といった「環境」の不足が考えられる。今後の取り組みとして、人口規模拡大に向け、ロールモデル紹介等による男性参加者の増加、学校導入等による若年層の取り込み、健康効果のアピール等による高齢者の参加促進が挙げられる。環境改善策として、既存施設の共用、仮設コートの設置、企業連携によるコートの増加、交流等による大会の増加などが挙げられる。また、障がい者団体との協力によるインクルーシブな普及の推進も挙げられる。今後も、誰もが生涯スポーツとして楽しめるピックルボールの魅力を伝え、さらなる普及に努めていく。

＜授業研究＞

運動特性と共生の学びを取り入れた単元の実践的検討 ～体育共生尺度の変容に着目して～

○根来彩夏（千葉大学大学院）、七澤朱音（千葉大学）

小学校学習指導要領体育編においては「障がいの有無に関わらずスポーツを共に楽しむ工夫をする経験」は共生社会の実現につながる学習機会であるとしている。バレーボールの運動特性である、攻守の侵入がないことや、防御から攻撃へ移行する際に味方との連携が必要になることは児童が積極的に運動に参加できる可能性や仲間と共に楽しむことを学ぶことができる可能性などが考えられる。そのため、本研究ではバレーボール及びシッティングバレーボール等を教材に用いた「アダプテーション・ゲーム」の実施による児童の「共生」への意識の変容を調査した。本調査の「体育共生尺度調査」において、有意差が認められた因子は「違いの受容」、「過度な勝利思考」の2つであった。第2検証では、児童が自分事として捉えるための手立てやアダプテーションの必要性の周知の不十分などの課題を解決するため、千葉市スポーツ振興課及び、当該小学校と協働しながら時数や授業内容を再検討していく。